

子どもに寄り添うことは難しいけれど.....

今子どもたちにとって、学校はたのしいところ安心して学べるところになっているのでしょうか。最近のニュースから拾ってみます。

奈良教育大学附属小学校では4年でいじめに合い転校したというニュースがありました。奈良教育大附属小と言えば、昔から先進的な教育実践を提案し続けている学校として、全国でも有名な学校です。そんな学校でもいじめがあるということです。また大阪の受験校で有名な清風高校で、2年の生徒がカンニングをして、学校側はその生徒に対して、全科目0点、家庭謹慎8日間、反省文日誌を書くこと写経80巻などの処分を言い渡されたのですが、本人は「死ぬという恐怖よりも、このまま周りに卑怯者と思われる方が怖くなってしまった。」という遺書を残して自殺したというニュースが流れました。また、守口市の中学校では、全学年のクラス替えを発表した後に3年のクラス編成でいじめの集ったクラスがあり、3学年だけ全学級のクラス替えをやり直すことになったとニュースで流れました。

それらのニュースはたまたま起きた氷山の一角ではなくどの学校でも起りうる事態にあると思うのです。今、中高一貫校から有名大学へという受験競争は当たり前になりそのために小学校からの塾通いの子どもたち、学校へ行けば成績を気にして、また、学校では小学校も中学校も守らなければならないたくさんの約束ごとがあります。その中でストレスを感じている子どもたち、いじめなどの学校にもあり、また先生には分からないところで進んでいるようにも思います。そんな中で、なんとかしなくてはと親の期待を背負っている子どもたちがいます。いじめは、なくなるどころか、今増加傾向にあるのです。

そんな下を向きたくなるような状況の中で、「風に立つ」袖月裕子著の本に出会いました。この本を読みながら、下なにか何かなくてもいいと勇気をもらいました。是非読んでみてください。その内容を少し紹介します。

主人公は中3になる春斗と、苦学に苦学を重ねて弁護士になった父親の達せと母親の縁の3人家族。父親は厳しく、春斗に勉強を積み重ねることが大切と、小さいときから塾に通わせ母親も父に賛同している教育家族の中で育って春斗も疑うこともなく勉強を頑引っていたのですが、そんな塾通い、中学校に入ってから疑問を感じるようになっていきました。そんなある日、塾に遅れそうになり、近くにある自転車を盗んで塾に行き見つかって補導されることになり、家庭裁判所で補導委託として、南部鉄器を製造している「清嘉」の親方に預けられることになるところから始まります。住込みとして南部鉄器造る手伝いをする中で春斗は変わっていくのですが父親はその補導委託にあたって春斗に条件をつけていたのです。それは、塾の課題を毎日やり、週末に自宅に郵送することも条件に訂約したのです。父親は勉強を続けることが将来、必要になる、子どものためだと強く思っていたのです。母親も初めのうちは賛同していたのです。

そして春斗は南部鉄器を造っている職人との交流を重ねる中で自分をとりもどしていき塾の課題の郵送もやめ、自分のやりたいことを見つけていきます。それは動物(馬)と触れ合う仕事をするということです。そして頑固に勉強が大切で欠かせないとしていた父親の心を動かしていくという物語です。風に立ち向っていく春斗をまわりで支えていく人たちとの交流を読んでみてください。私はこの本を読みながら、春斗の思いは誰でもが持っている思いだと考えています。受験競争で勝つことが幸せにつながるというのは短絡に過ぎると思っています。子どもも自分の可能性を信じ自分のやりたいことをやっていくことは輝きがあると思っています。それは親の願いでもあると思っています。子どもは無限の可能性を持っていることを信じたいと思いました。親にも思いがあるのですが、子どもにも子どもの思いがあるのです。その思いを大切にするのが親だと思ふのです。まかされたら、子どもは自分でちゃんと考えていくと信じていいのです。最後になりますが、この原稿を書いているとき、不登校新聞が届きました。その一面にひかりんちゃん(タレント、インフルエンサーで、10代の若者からたくさんのお話を寄せられる現20才)のお話があったので抜粋します。ひかりんちゃんは、中2〜中3で不登校だったそうです。そして、その当時のことをふり返ってみて、本当によかったと思うのは、お母さんと腹を割って話せたことです。本気で殴り合っ、気持ちもぶつけ合えたのは大事なことでした。分かり合えるようになってから、「ひいちゃんのやりたいようにやたらいいよ」って、お母さんは一貫して私の味方でいてくれましたと……そして「あなたの味方だよ」と。「あなたのためだよ」は違うよ。「あなたの味方」はあなたを尊重するということ。「あなたのため」には、大人の側の上から目線や自己満足が入っている気がします。「あなたのため」と言いながら「こうしなさい」「自分だったらこうするよ」と押しつけてきます。子どもは大人が味方でいてくれているのが自己満足で言っていることを敏感に感じとっていると言っています。

私もひかりんちゃんと同じように思っています。どんなに「あなたのため」と言ってもその言葉は子どもには届いていないのです。自分の自己満足でしかない。子どもは見抜く力と感性を持っていると思っています。そして親が本当に自分の味方だよと感じたら、子どもは自分の力で自分のやりたいことをできるようになるのです。それは、春斗さんも同じです。その姿を見て、あんなに頑固だった父親が春斗がやってみたいならやってみようよと変わるのです。

“あなたはあなたのみで大丈夫だと信じることも大切さに思いを馳せました。”

2024.4.17 竹内春雄